

私事雑記帳《1》

欧州旅行に行ってきました

高橋さなみ ひざりやま皮膚科（横浜市港南区）

新婚旅行以来、欧州に行きたいと思いつつとチャンスがありませんでしたが、昨年のGWと年末から年始にかけての2回、娘とふたりで欧州旅行を決行しました。全く異なるかたちの旅でしたがどちらも思い出に残るおすすめの旅でしたので、貴重な神皮の紙面で恐縮ですがご報告させていただきます。

昨年2月下旬、三重県で学生生活をおくっている娘からGWに続けて休みがとれると連絡がありました。大学勤務の主人は日程的に難しいのでそれならば娘とふたりで欧州に行こうかと急に思い立ってお馴染みのJTBデスクで相談したところ、もう欧州行きのツアーはどこも売り切れですとのこと。諦めかけましたが親切に検索してくださり、いまこの場で航空券のみならとれますとのことでしたので、ウィーン経由プラハ行き往復航空券を勢いでとってしまいました。私は以前から“プラハの春”という言葉の響きから漠然とチェコに憧れており、最近身近な友人やS先生が訪れたと聞いていましたのでチェコに行きたかったのです。とはいえ、旅慣れているわけではなく英語が得意なわけでもないのにフリー旅行で大丈夫かと不安が頭をよぎりましたが、せっかくの機会ですので前向きにとらえてすぐにガイドブックを買いプランをたてることにしました。

最初にホテルを確保しなくてはなりません。今やネットの時代、国内旅行で何度も利用している

Booking.comサイトでプラハと検索するとあつという間に絞り込むことができ、Mucha博物館の目の前にある20世紀初頭のアールヌーボー様式のおしゃれなパレスホテルを連泊で予約できました（Booking.comサイトでは空港から宿泊ホテルまでのタクシーも事前に予約でき、当日はちゃんと名前入りボードを掲げたドライバーが空港に出迎えてくれました）。そして以前何度か利用してその都度大満足だったベルトラのサイト（おすすめです！）から、田舎町ターボとチェスキークルムロフ行きの1日プライベート日本語ツアー（日本語の上手な素敵なおチェコ人女性ガイドさん、ベントのドライバーさんとの最高のプライベートツアーでした）と、プラハの居酒屋「ホスホダ」巡りと夕暮れ鑑賞ツアー（ビールはもちろんハムがふんわり柔らかく意外なくらい美味しかったです）をオプションツアーで予約しました。また“プラハの春”国際音楽祭はスメタナの命日である5月12日に開幕するとのこと日程はニアミスでしたが、オープニングが催される市民会館にて5月3日に行われるモーツァルト&ビバルディ七重奏コンサートをホームページから予約（本場の演奏を目の前で観て聴いて感動ものでした）、さらにS先生がプラハ在住のご友人を通してCodaというおすすめのレストランも予約してくださいました（とってもおしゃれで美味しかったです！）。



プラハぶらり散歩



チェスキークルムロフ

プラハはカレル橋を中心に6つのエリアに分けられており、エリア間は地下鉄やトラムで楽に移動もでき、街はじゅうぶん徒歩でも回れましたし、お天気にも恵まれてすべてが最高でした。娘とぶらぶら歩きながら地元の人々にぎわうレストランにふらっと入って昼間からビールで乾杯しました。またどこで食べてもスープがとても美味しかったので、お土産にスーパーで各種レトルトスープとマジョランカというドライハーブを買いこんできました（マジョラムという名で日本でも売っています。ニンニクスープのチェスネチュカはレシピがわかったのでその後自宅でも何回か作っていますがカラダが温まってほんとうにおすすめです）。

最終日は乗り継ぎのためウィーンに1泊しました。ベルトラのサイトで予約したウィーン市内半日観光というプライベートツアーに参加しましたが、ここで出会えた初老の日本人ガイドさんはウィーン在住、芸大音楽科卒、ウィーン国立アカデミー音楽科ご出身の元バリトン歌手の方で、息子さんがなんと皮膚科の某大学教授だそうでした。チェコのついでではなくて先にウィーンに来るべきでしょと熱く語られ（すみません!）、半日ツアー終了後おススメだからとOberlaaのレストランまでわざわざ連れて行ってくださいました。その日はもう午後空港に移動し帰国する日だったので、ザッハートルテを（ジップロックのタッパーにいれて）お土産に日本に持ち帰りました。ウィーンにももっと長く滞在したかったです。

さてチェコの余韻もまだ残る昨年9月の下旬、今度は娘がママと旅行に行けるのはこの年末年始が最後かもしれないと言ってきました。確かに娘は当時医

学部5年生でしたので本当にそうかもしれません。ならば今度はどうしてもスペインに行こうと思い立ちました。実は我が家は2年前の夏休みに家族でスペイン旅行を予定していましたが、出発の前日にバルセロナのランプラス通りでの車の暴走テロ&犯行グループが逃走中とのニュース速報がとびこんできたため、すっかり怖くなって出発当日の朝、急遽キャンセルしたのです。

リベンジを誓って再びJTBデスクに行きました。なんと希望の日程のツアーはビジネスクラス利用のコースしか残っていませんとのことでしたが、主人はまた日程的に難しいので娘とふたり分の支出ならばビジネスでもいいかと（笑）、さっそくスペイン周遊ツアーを申し込みました。今回は添乗員さんも一緒、すべていろいろおまかせのツアーですっかり安心。年末は当然のことながら出発ぎりぎりまで仕事でしたし、どの都市に行くのか聞かれても答えられない丸投げの状態で出国しましたが、ビジネスクラスの空の旅は想像以上に快適ですっかりハマってしまいました（もうビジネスでないと欧州には行かないかも!）。

マドリッドに2泊、その後新幹線AVE（1等席）でコルドバへ、その後セビリア、グラナダ、その後飛行機でバルセロナに移動して2泊。一緒のツアーの皆さんは一回り上の仲の良いご夫婦が5組、おひとり参加の女性、おしゃれな浪花のキャリアウーマン姉妹でした。旅の途中からすっかり皆と打ち解け、最後のバルセロナは大晦日にあたりましたのであのモエシヤンまでが飲み放題という大サービスの特別なガラディナーを楽しみました。さらに宿泊したホテル



セビリア



バルセロナ（やらせです!）



バルセロナ（サグラダファミリアがみえます）

の大きなバルコニーからスペイン広場のカウントダウン花火を満喫しました。スペインはその昔、イスラム教色が強い時代から日の沈むことのない大帝国を築き、あのガウディやピカソを生んだ情熱と芸術の国。数々の建築物や美術品にはもちろんでしたが、最終日に訪れたサグラダファミリアにはほんとうに圧倒されました。

今は3月下旬、楽しかった2度の旅行を思い出し

ながらこれを書いています。新型コロナの影響でその後世界の状況が激変してしまいました。自分自身も落ち着かない毎日ではありますが、欧州のおかれている窮状に思いをはせると本当に心が痛みます。今後の事態の好転を心から祈りつつ、何気ない日常を大切に自分ができることをしっかりやっていきたいと思っています。

私事雑記帳《2》

ストレートシックスに憧れて

川口博史 金沢皮膚科（横浜市金沢区）

我々の年代は、18歳になったらまず自動車の免許を取って、ドライブを楽しむのが当たり前でした。自分は実家にあったスバルR2でドライブデビューしましたが、初めて自分の車を買ったのはターセルでした。トヨタ初のFF車、FFなので1500ccの排気量の割には室内が広く燃費もよかったです。しかしとにかくエンジンが回らない！ 5000rpmくらいで頭打ちでした。次に乗ったのが中古のTE71レビン、前回の反動でエンジンが高回転まで吹けるもの、ということで買いました。2T-GEUエンジンは、当時は一部の車種にしか搭載されていなかったDOHCエンジンで(当時はまだ2バルブでしたが)、これはきちんと7000回転まで回ってくれて楽しい車でした。FRの軽量スポーツモデルで、こいつとは北海道1周とか、冬は自分でタイヤを履き替えて、スキーにもたくさん出かけました。その間にレビン／トレノ

はAE86にモデルチェンジしましたが、その次のモデルからFFになってしまうということがわかったので、FRの最終モデルを半ば衝動的に買ってしまいました。AE86に搭載されている4A-GEUエンジンは、1587ccで圧縮比9.4、4バルブのツインカムエンジンで、低速トルクは細いがそれこそ7700rpmまできっちり回るエンジンで、高回転まで軽やかに吹け上がる音が大好きでした。「頭文字D」の車ですが勿論安全運転をしていました(笑)。当時から車好きな友達と、いつかは6気筒エンジン車に乗りたかねと、話していました。6気筒エンジンはピストン運動のタイミングが気筒ごとに120度に配置され、滑らかな回転が特徴です。その中でも憧れていたのがBMWの6気筒2リッターエンジンでした。シルキーシックス、絹のように滑らかな吹け上がりといわれ、いつかは乗ってみたいと思っていました。個



ドイツ時代に乗っていたE30（1988年）



E36



E46→E91 納車の日 東名横浜ショールームにて

人的にはメルセデスよりBMW派でした。6気筒、FR、マニュアルミッションが乗りたい車の条件でした。

1988年にドイツに留学する機会があり、さっそく現地でBMWの中古車探しをしました。本国でもそれなりにいい値段がついていて、なかなか予算に合う車が見つかりませんでした。ようやく5年落ち（と記憶している）のE30の323iを購入しました。マニュアル車で、念願の6気筒、FR、マニュアルミッション車に乗ることができました。カタログに出ている最高速度は204km/h。家族とドライブ中、皆が寝ているうちにアウトバーンで実際に試しました（笑）。ドイツ留学中の2年半、こいつにはとてもお世話になりました。息子が生まれて、退院時に乗せたのもE30でした（彼は現在E87のオーナー）。帰国時には、ありがたいことに小野秀貴先生が買い取って、その後も乗ってくださいました。

帰国してから、鶴屋町にあったBMWディーラーにふらっと立ち寄った時に、E36の試乗をさせてもらいました。エンジンの吹け上がり方、何よりエンジン音が、ドイツ時代のE30を彷彿とさせてくれたのです。Tübingenのアパートは丘の中腹にあり、街の中心部から最後に坂を駆け上がって家に帰るのですが、その時に回したエンジン音を思い出してしまい、325iを即購入しました。担当セールスは、旧モデルのエンジン音も残すように味付けしているんですと言っていました。真偽のほどはさておき、自分には似た音に聞こえました。それまではマニュアルミッション命でしたが、正規ディーラーには6気



E91→F31 納車の日 ミツ沢ショールームにて

筒モデルのマニュアル車がなく、ここでマニュアルミッションと決別することになりました。アルピナを購入するだけの財力はありませんし。その後モデルチェンジするごとに巧みに試乗させられ、E46の328i、ドイツ人の好きなツーリングワゴン、E91の325iツーリングと乗り換え、現在はF31の335iツーリングに乗っています。F31を購入するところから、時代はハイブリッドやエンジンのダウンサイジング化がなされて、BMWも例外ではなく3シリーズはどんどん4気筒ターボ化されていますが、昔のドックンターボのイメージがあって、ターボはあまり好きではありません。実は今乗っているF31もターボ車ですが、6気筒の選択肢がこれしかないのに乗っています。最新の3シリーズ、G21もハイエンドモデルはかろうじて6気筒ターボがラインアップされていますが、FRではなくxDriveの4WD。そして車体が少しずつ大きくなっていて、今でさえ苦労している、自宅の車庫からの出し入れに問題が生じそうです。サイズ的には1シリーズでも構わないのですが、現行モデルはFFベースの横置き4気筒、ハイエンドモデルで4WD。FRとの別れが近そうです。国産車でも調べてみるとV6エンジン搭載車は皆車体が大きく、自宅の車庫の設計を失敗したと反省することしきりです。時代の流れとは言え、次に車を買うときは、いよいよ6気筒エンジンともお別れしなければならないのか、それとも自身の車庫入れの精度を上げて、もう1台6気筒にこだわるか現在悩みぬいています。その前に車代を捻出するべく、お仕事を頑張らなくてはなりません（笑）。

私事雑記帳《3》

ピアノと私

羽尾貴子 羽尾皮膚科クリニック（東京都品川区）

2018年9月、横浜市皮膚科医会の50周年記念式典の席で、岡澤ひろみ先生とガーシュウインの「ラプソディ・イン・ブルー」を連弾させていただいた日が、つい昨日のこの様に思い出されます。ご来賓や医会の先生方の前で大変緊張しましたが、1年間かけて練習してきた成果を披露することができ、とても貴重な経験でした。

3歳の頃、当時はスタンダードだった女の子の嗜みとして、親に連れられるままピアノ教室に通い始めました。小学生の頃はピアノを練習しなければ遊びに行けないという母の教えを守って渋々でも練習していましたが、中学、高校と部活動で暗くなるまでグラウンドで過ごすようになってからは、レッスンの前日にピアノに触る程度でしたので、当然上達することはありませんでした。ただ、ピアノを始めただばかりの頃、父がよく冗談で「将来はコンセルバトワールに留学だな」などと言って私がピアノを弾くことを喜んでいたので、ガッカリさせたくなくて止められなかったのかもしれませんが、そんな消極的な理由で細々と続けていましたが、大学入学を機に上京してからはますます遠のいて、フェードアウトしてしまいました。

ピアノのレッスンを再開したのは50歳の時でした。実は、私の結婚披露宴で妹と従姉妹達がパッヘルベルの「カノン」を演奏してくれたことがきっか



けとなって、約20年間、8月最後の週に親戚が40～50名集まって「カノンの会」と称する演奏会を行っていました。叔母や叔父の歌あり、子ども達の踊りありの学芸会です。私も時々昔習ったピアノ曲を演奏してお茶を濁していましたが、姪や甥、従姉妹の子ども達の上達に刺激されて、50歳の記念にリストの「愛の夢」を弾いてみたいと思うようになりました。1年かけて譜読みを終えたものの、CDの演奏とはあまりにかけ離れており、どうしたら近づけるのかプロにご指導いただこうと思って近くのピアノ教室の門を叩いたのです。久しぶりのレッスンではまず弾き方からご指導を受けました。肩から指先にかけて力を入れて弾く私に対して「脱力、脱力」と何度も繰り返されました。学生時代は根性と気合の運動部だったので、身体中に力が入って力んでしまい、指も動きませんでした。「お臍の下の丹田を意識して体幹をしっかりと」「手は第3関節を高くして丸くする」「もっと優しく、指は高く上げない」等々の指導は学生時代にも教わっていたのかもしれませんが、私自身の熱意の欠如もあって身に付いていないことが数十年ぶりに露わになりました。長年染み付いた自己流はなかなか修正することができませんでしたが、少しずつ指を動かせるようになり、その年の「カノンの会」ではなんとか「愛の夢」を最後まで弾くことができました。そんな矢先に増田智栄子会長から横浜市皮膚科医会50周年記念式典での連弾のお話をいただきました。とても無理だと思っていた憧れの曲を弾き終えた後で、気持ちが大きくなっていったのかもしれませんが、身の程も知らずにお引き受けしてしまいました。

その後、岡澤先生と相談して、演奏曲を私の痛恨の一曲（「愛の夢」の翌年にチャレンジしたものの発表会で大失敗した）「ラプソディ・イン・ブルー」にさせていただきました。50ページに及ぶ大作の楽譜を省いたり繋げたりして3分の1程度の曲にまとめて、記念式典の約1年前から岡澤先生のご自宅

に伺って練習を開始しました。当時はそれまで勤務していた横浜中央病院を退職して東京都内で開業したばかりでしたので、練習は月に1～2回がやっとでした。それでも岡澤先生にリードしていただきながら、久しぶりの連弾はとても楽しいものでした。1回毎の到達目標を決め、何とかクリアしながら練習を重ね、通して弾けるようになってからは岡澤先生の提案でサンハートホールを借りてステージでの予行練習もやりました。

ついに本番の日、大型台風24号の上陸で交通機関への影響が懸念される中、式典は無事に開催されました。そして、懇親会の席で憧れだったホテルニューグランドのレインボーボールルームの舞台上で

演奏することができました。岡澤先生の素晴らしい演奏を台無しにしない様に必死だったのですが……。決して上手とも得意とも言えないピアノですが、最近ようやくその作曲家と時代を超えて繋がって、その意図を解釈する楽しみがあることを知りました。弾くことに必死だった学生時代には知ろうとする余裕がなかったのだと思いますが、このたびの連弾やデルマ合唱団で楽しみながらの練習ができたことによって感じられるようになったところが大きいと思います。これからも1年に1曲を目標に、過去の偉大な作曲家に思いを馳せながら、ボケ防止に細々と続けていきたいと思っています。

